

平成30年3月30日

研究開発完了報告書

住所 東京都小平市たかの台2番1号
管理機関名 学校法人 創価学園
代表者名 理事長 原田 光治 印

平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成29年 4月 3日（契約締結日）～平成30年 3月30日

2 指定校名

学校名 創価高等学校

学校長名 木下 清一

3 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

4 研究開発概要

○【言語技術】

日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成

○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成

○【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			○				○				○	

(2) 実績の説明

○【言語技術】(学校設定科目として週1時間の授業を実施)

〈1年生〉

以下の3つの技術を日本語と英語でトレーニングした。

- ①「対話」の技術…「結論を先に言う」「意見と理由を1セットで発言する」「5W1Hで対話の中身を具体的にする」等の質問・応答・反論・交渉の効果的な方法。
- ②「作文」の技術…パラグラフの書き方。接続語を工夫し文と文のつながりを持たせる書き方。事実と意見を立て分け論理的で説得力のある文章の書き方。
- ③「情報伝達」の技術…「情報を整理分類する」「ラベリングする」「空間的・時間的秩序の原則」等、分かりやすく情報を伝える方法。

※1年間GCPで学んだ内容をもとに、1000字の小論文作成のための指導を行った。

※高校生活のキャリアデザインを文章化する「パーソナル・エッセイ」作成の指導を行った。

※課題作文に関しては、1年間で日本語が15本ほど、英語で5本ほど書かせ、教員が一人ひとり丁寧に添削・コメントし、フィードバックした。

〈2年生〉

以下の3つの技術を日本語と英語でトレーニングした。

- ①「情報分析」の技術…対象物としての絵やテキストに書かれた情報を証拠として取り上げ、それらを総合して解釈を示す方法。彼我の間に潜む暗黙知(warrant)の確認。
- ②「認知」の技術…絵・テキストを用い、1つの対象物に対して複数の視点に立つ方法。
- ③「議論」の技術…論理の組み立て方・立論の立て方・反論の方法・ディベートの実践。

※「議論」の技術をもとに、GCP企画「人権ディベート」を3学期に行った。

※校内の進路指導部と連携し、大学の志望理由書作成の指導を行った。

※修学旅行先の青森県について研究し、ポスターセッションを行った。

〈その他〉

- ①生徒に毎時間、授業で学んだことを記入・ファイリングさせ、ポートフォリオを作成させた。
- ②担任教員が言語技術の授業に毎回一緒に参加し、教員自身の言語運用能力の向上に努めた。
- ③創価中学校、東京創価小学校において「言語技術」の内容を取り込んだ授業を実施した。
- ④創価大学で論文作成指導をしている教員に授業を見てもらい、指導・助言をいただいた。
- ⑤学園祭のメイン展示会場、校外の方を対象とした教育公開講座、オープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。

○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)】(全校生徒対象のSGHプロジェクト)

- ①1年生は「SDGs、環境、貧困」を、2年生は「戦争、冷戦後の紛争、人権」を、3年生は「国際パートナーシップ(模擬国連)」をテーマに設定し地球規模課題に対する探究学習を進めた。
- ②学期に2回(5月、6月、10月、11月、1月、2月)、GCP企画の時間を設け、運営は各クラスの希望者で構成されたGCPリーダーによって実施された。
- ③3年生は、GCP企画の総括として各自がSDGsからテーマを設定して課題研究を行う「ファイナル・プロジェクト(Final Project)」に取り組んだ。また、その成果を日本語・英語の二言語のポスターと論文にまとめ、ポスターセッションを実施した。
- ④2年生の3学期企画「人権ディベート」は活動報告会にて公開した。
- ⑤7月のオープンキャンパスでGCP企画「貿易ゲーム」を、学外の来校者対象に実施した。

○【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】（選抜生徒16人対象のSGHプログラム）
毎火金の18時～19時30分に、SGDsのテーマと関連づけながら、各グループが設定した仮説
をもとに、地球規模課題に関する探究型学習を行った。

- ① 地球規模課題に関する議論と講義に加え、アクティブラーニングやプレゼンテーションスキル
を活用した探究型学習を実施し、問題の理解と論理的な議論を展開した。
- ② 沖縄とカリフォルニアで実施されたフィールドワークでは事前に仮説を設定し、論証のために
必要なアンケート調査を実施し、論理的・批判的思考を高めた。
- ③ 報告会は英語での実施を基本とし、SkypeやYouTubeなどのSNSを利用して海外との交流や情
報発信を行った。
- ④ GLPを通じて学んだことをメッセージとした映像作品を制作し、英語化した上でYouTubeを通
じて、世界に発信した。
- ⑤ 研究成果をまとめて英字新聞を作成し、SGH校はじめ、関係各所に配布した。

○【その他】

- ① 国内外フィールドワーク（全校生徒より希望者）：GCP、GLPで定めた各テーマに則り、カリ
フォルニア、沖縄、広島、岩手、東京（国連大学、国立ハンセン病資料館、JICA等）で行った。
そこで学んだ内容を、10月に行われた学園祭等において、ポスターセッションにて発表した。
また、長崎で行われたCIF（Critical Issues Forum）に参加した。
- ② グローバルセミナー（全校生徒対象のセミナー）：国内外から著名な識者を招聘し希望者を対
象としたセミナーを開催した。4月1回、6月1回、12月1回、2月2回と5回行った。
- ③ イングリッシュ・キャンプ（全校生徒より希望者）：創価大学にて1泊2日で実施した。留学生と
3、4人ずつのグループを構成し、日本文化に関する英語によるポスターセッションを行った。

7 目標の進捗状況、成果、評価

【言語技術】

- ① 年度末に1、2年生全員にアンケートをとった。対話・作文・情報伝達の各技術を学んだ1年
生は、90%以上の生徒が、それらの技術の重要性を実感している。情報分析・認知・議論の各
技術を学んだ2年生は、80%以上の生徒が、それらの技術の重要性を実感している。また、同
アンケートにおいて「日本語で学んだ言語技術を英語の授業で活用できた」と回答した生徒は1
年生で79%、2年生で82%いた。さらに「全体の構造や、つながりの言葉を意識しながら、英
語のパラグラフを書けるようになった」と回答した生徒は1年生で73%、2年生で83%い
た。いずれも1年生より2年生の割合の方が高くなっており、2年間の「言語技術」のトレー
ニングの成果が出ていると言える。
- ② 生徒には毎回の授業で「学んだこと」と「それらをどのような場面で活用できるか」というこ
とを記録・ファイリングさせた。これにより生徒は学びの履歴をいつでも振り返ることができ、
他の授業や行事において、ファイルを見返しながら身につけた技術を活かそうとする生徒の姿
も見られた。実生活に活かせるポートフォリオの作成ができた。
- ③ 言語技術の成果は、英作文にも表れている。第3回英検2級合格者のCSEスコアの平均におい
て、リーディングでは1年生よりも3年生の方が高い得点であったが、ライティングにおいては
1年生の方が高い得点となった(3年532、1年557)。
- ④ 言語技術の授業に担任教員が毎回参加するようになり、「言語技術」教育の取り組みが全校的

なものになった。各担任教員が担当する教科やLHRで「言語技術」を活用する流れもできた。一例を挙げると、英語の授業では、視点を変更して教材の文章を書き換える取り組みや、教科書に書かれている客観的な事実をもとに、自分の意見をパラグラフで書く取り組みを行った。地歴公民の授業では、教科書や資料集に掲載されている図表や風刺画を分析する取り組み（分析の技術）や、立場が対立する事件について視点を変えて考察する取り組み（認知の技術）を行った。理科の授業では、実験の意図を説明（説明の技術）させたり、実験手順を経過型パラグラフで書かせたり（作文の技術）した。

- ⑤創価中学校・東京創価小学校においても「言語技術」の取り組みが始まったことにより、小中高12年間の「言語技術」教育のカリキュラムを検討・作成する委員会が立ち上がった。
- ⑥創価大学の初年次必修科目である「学術論文作法」を担当する教員と授業参観の交流が開始し、言語能力を育成するための高大連携がさらに強化された。
- ⑦つくば言語技術教育研究所（三森ゆりか所長）の研修に教員を派遣し、指導教員の増強を図ることができた。また、その言語技術の内容をもとに、小中高の教員対象に研修を開催した。
- ⑧高校生活のキャリアデザインを文章化する「パーソナルエッセイ」の作成は、本校で10年以上前から取り組んでいるが、「自分の意見が明確で、そのような意見をもつに至る理由もよくわかり、読みやすい」との評価が各教員から寄せられた。
- ⑨各教科の授業やクラスでの話し合いの場面では、生徒たちが結論・理由の順番で発言し、ナンバーリングを用いることにより、議論の進行がスムーズになり内容も濃いものになっている。
- ⑩英会話の授業や英作文の課題において、発言する際や文章を書く際の「型」を学んだ結果、これまでの生徒たちに比べ、より積極的に話し書いている姿が見られる。

【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①SGHの2年目となった本年は、昨年度の取り組みをベースに各学年の企画を、より発展・充実させることができた。1年生の企画においては、全ての企画でSDGsのどのゴールが本日の企画のターゲットであるかを企画の開始前と終了後に確認して意識付けさせることで、SDGs達成への問題意識を高めることができた。3年生の企画では、模擬国連を2つのテーマ（COP21、核兵器禁止条約）で実施し、生徒の交渉力や論理的思考力を更に育成することができた。
- ②言語技術の授業との連動が進展した。1年生は言語技術で学んだ「作文の技術」をもとに、1年間のGCP企画を通して学んだことを事実と意見のパラグラフに分けて1000文字でまとめた。2年生は「議論の技術」をもとに、3学期の企画である「人権ディベート」を実施し、言語技術がGCP企画を支えるという本校の取り組みが最大にいかされる形となった。
- ③学年行事との相関性を高めることができた。2年生の企画においては、毎年行っている横浜研修のテーマにGCPで学んだ「核兵器廃絶」と「人権」を取り入れ、これらに関する施設を訪れることで実感を持ってテーマに関して深めることができた。また3年次に行われる修学旅行の事前学習としてSDGsからテーマを設定しグループごとにポスターセッションを実施した。
- ④先行実施している高校3年生の課題研究「ファイナル・プロジェクト」についても、より充実させることができた。日本語でのレポート作成からスタートし、成果をポスターとしてまとめ、最終的に日本語・英語の二言語でのポスターセッションを実施した。1、2年生への公開も行い、1、2年生が来年度への意欲を高める機会ともなった。最後には2000字以上の最終レポートにまとめた。英語においては、クリティカルライティングセンターの教員による添削指導を実施した。また、ファイナル・プロジェクトの準備として、「現代社会」と「英語表現Ⅱ」の授業にお

いて、プレゼンテーションスキルや情報収集能力を習得するための教科横断的プログラムも実施した。

- ⑤アンケートの結果にも、GCP 企画を通して生徒の関心や協調的問題解決能力の向上が見られる。「地球的問題・課題（紛争・人権・環境・貧困等）についてのニュースに興味がありますか」との問いに対して、GCP 企画に初めて取り組んだ1年生は、5月のアンケートで「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒が55%だったのに対して、1月に実施したアンケートでは、73%に大きく向上した。2年間のGCP 企画を経験した3年生にいたっては、80%を超える結果となり、地球規模課題に関する生徒の意識は大きく向上した。
- ⑥GCP の運営を担った GCP リーダー（生徒の希望者で構成）は半年交代制をとり、前期は150名、後期は146名の生徒（全校生徒の約15%）が活動した。GCP リーダーに実施したアンケートでは、GCP リーダーの活動を通してチームワークが身についたという生徒が63%、リーダーシップが身についたと答える生徒が51%と多く、生徒主体に運営を行う体制が一定の成果をあげていることがわかる。

【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

- ①グーグルクラスルームをはじめ、ICT の使用方法について徹底して事前指導を行った。これにより昨年度よりも課題探究が深まった。
- ②課題研究方法を指導するために、「中学生の SNS 使用」をテーマにした課題探究学習を行い、意見文を書かせた。これにより使用教材である「学びの技」（玉川学園出版）の活用を、強く意識しながら研究することができた。
- ③フィールドワークに向けて、SDGs と関わりのある小テーマ「平和的な都市計画」「地球温暖化」「貧困」「環境と開発」の4つを設定し、テーマごとに4人1組のグループワークを行わせた。仮説を立てて進めることで、論理的かつ分析的な探究型学習を実施することができた。
- ④オープンキャンパスや、学園祭など、公開された空間でのポスターセッションの機会を多く持つことができた。また中間報告会および活動報告会において、英語のプレゼンテーションを実施した。横浜での SGH 全国高校生フォーラムにおいても発表を行った。3月には SGH 甲子園にも出場予定であり、英語によるポスタープレゼンテーションおよび、ラウンドテーブルディスカッションへの参加に向けて、継続して準備を行っている。
- ⑤ジャパンニュースの監修のもと、フィールドワークまでの研究成果をまとめて英字新聞を作成した。完成した英字新聞は、第2回全国中学高校生英字新聞コンテストに出品された。
- ⑥2018年3月に実施される核廃絶に関する高校生による国際会議・クリティカル・イシューズ・フォーラム（カリフォルニア・ミドルベリー国際問題研究所主催）に向けて、全員で英語によるプロジェクト作品を製作した。完成作品は活動報告会において、英語で発表した。
- ⑦アメリカの核廃絶問題の専門家と、カリフォルニア＝東京間をオンラインで結んで、レクチャーを行うことができた。あわせて2017年のノーベル平和賞受賞者・ベアトリクス・フィン ICAN 事務局長による講演会にも参加し、解決困難な地球規模課題の最前線に触れることができた。
- ⑧映像制作会社の専門家を招聘して、映像のクリティカルリーディングを行った。その上で、自分たちが GLP を通じて学んだことをメッセージとした90秒の映像作品を制作し、英語化した上で YouTube を通じて、世界に発信した。
- ⑨GLP で学習した生徒が、オーストリア・ウィーンで開催された国際会議「CTBTO SnT」に、日本の高校生代表として招聘された。

⑩ G L P で学習した生徒が、ドイツ・ハンブルクで開催された G 2 0 「Global Classroom in the G20 Finance Track」に日本代表として招待された。

⑪ 評価方法として、年に 3 回「あなたにとっての地球市民とはなにか」を記述させ、各人が自分自身の意識の変容を確認しながら、1 年間に及ぶプログラムを終わらせることができた。また資質・能力の基準について、事前に提示しており、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させることで、変容を測ることができた。

【その他】

上記に加えて、S G H の活動を通して、本年度は以下のような成果が見られた。

○生徒の活動： 第 2 2 回全国中学・高校ディベート選手権（ディベート甲子園）ベスト 8、「日本高校生模擬国連大会」出場、第 1 2 回「全国高校生英語ディベート大会」出場、第 6 回手帳甲子園最優秀賞受賞。

○教員の活動： 第 10 回 Symposium on Writing Centers in Asia（2018 年 3 月 9 日・東洋大学白山キャンパス開催）にてクリティカル・ライティングセンターの取り組みを報告。

第 9 回 World Environment Education Congress（9 月 9 日～15 日、カナダ・バンクーバー）にて報告。

<添付資料> 目標設定シート

8 次年度以降の課題及び改善点

【言語技術】

- ① 「言語技術」の授業で行っている内容を、校外にも広く知ってもらうため、公開授業を定期的を実施する。また、ホームページや SNS での発信を強化する。
- ② 3 年次の G C P で行うファイナル・プロジェクトにおいて、最終レポート作成指導を国語科・英語科・地歴公民科と連携し、合教科型のモデルとなるプロジェクトを推進する。最終レポートの内容充実のために、2 年間トレーニングしてきた言語技術を総復習する。
- ③ 生徒の論理的思考力・批判的思考力の伸長を評価するために、客観的に測るアセスメントテストの導入を検討する。
- ④ 生徒は、言語技術の重要性は理解している（90%以上）ものの、活用できているかどうかの質問に対しては、昨年度同様 70～80%前後と評価は比較的低い。昨年度に比べ、「言語技術」を授業外で活用しようとする意識は大きく高まったが、さらに学校生活のあらゆる場面で「言語技術」が活用される体制を強化し、学校全体で言語運用能力の向上を図る。例えば、「言語技術」に基づいた、校内のあらゆる活動で意識すべき言葉の使い方ルールを作成する。また、「言語技術」の授業に参加した教員が取り組んだ実践事例を蓄積していく。
- ⑤ 東京創価小学校・創価中学校と連携し、「言語技術」教育の年次配列をよく考えて、効果的な 1 2 年間の「言語技術」教育カリキュラムを作成する。
- ⑥ 作文の添削・評価にかかる時間は膨大である。持続可能な取り組みにするためにも、評価のためのルーブリックや、自己・相互による評価法の開発を推進する。

【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①都内のフィールドワークは、各学年の GCP 企画と、より連動した内容になるようにする。具体的には、「JICA 地球ひろば」は1年生、「国立ハンセン病資料館」は2年生、「国連大学」は3年生対象へと組み換える。対象学年と実施時期もそれぞれ設定することで学習段階に応じたより深い学びを提供できる場とする。また海外フィールドワークは時期を夏季より秋季に変更し、現地高校生との意見交換および識者との交流、プレゼンテーションを行う。
- ②来年度のファイナル・プロジェクトは、2年間「言語技術」の授業を履修した生徒が初めて取り組むことになる。言語技術で身につけた「作文の技術」などを基礎に、より論理的な最終レポートを作成できるように、さらなる合教科型のプログラムを組み立てていきたい。また、テーマの設定やレポートの添削など、より細かな指導が行き届くために人員の増強を図りたい。今年度は地歴公民科の教員、英語科の教員でファイナル・プロジェクトの指導に取り組んだが、来年度は各クラスの担任が関わっていけるように、指導や評価のポイントをさらに確立させたい。
- ③ファイナル・プロジェクトの一環として、自ら設定した研究課題に関わるフィールドワークを夏期休業中の課題として推進する。
- ④ファイナル・プロジェクトの日本語・英語でのポスターセッションを、外部公開とする。
- ⑤GCP 企画で行っている内容を、校外にも広く知ってもらうため、定期的に公開する。本校の GCP の取り組みを、近隣の小中学校を対象に行い、さらなる普及につとめる。
- ⑥生徒の学びをポートフォリオとして残して、個人の探究学習の成果として保管させる。Japan e ポートフォリオと連動させていく。

【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

- ①フィールドワークに向けて、SDGs と関わりのある小テーマ「平和的な都市計画」「地球温暖化」「貧困」「環境と開発」の4つを設定し、テーマごとに4人1組のグループワークを行わせることで、生徒の取り組みに多様性が生まれた。しかし、テーマがバラバラになってしまい、全体としての講義や学びの課題設定が曖昧になってしまった。また3学期中心に英語で取り組んだ核廃絶問題は普遍性があり、内容が文系・理系を跨ぐものであったにもかかわらず、実際の授業時間が非常に短くなってしまった。これらをふまえ、2018 年度は全体としての学習事項を核廃絶問題に設定し、このテーマが SDGs にどのように波及していくのかをグループごとに研究調査に取り組む。年間テーマの設定に合わせて、夏季フィールドワークを「広島」と「長崎」に設定する。また日本の核監視施設の現状を知るために、茨城県東海村の日本原子力機構の見学を行う。
- ②これまでの2年間、教材として玉川学園の「学びの技」を使用してきた。シンプルで、プレゼンテーションを中心とした発表力を高めるのに優れた教材ではあったが、言語技術の導入により論理的に課題設定ができ、文章を書く力の備わった生徒が揃う 2018 年度は、より分析的で高度な取り組みをサポートするために、啓林館の「課題研究メソッド」をテキストとして導入する。
- ③資質・能力についての客観的な評価アセスメントを取り入れていくことを検討する。
- ④SNS を活用して、日常の活動を発信すると共に、海外の高校生との意見交換や交流を活性化させる。

【担当者】

担当課	経理募金課	T E L	042-342-2611（代）
氏 名	山下 英一	F A X	042-342-2617
職 名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp